

## 「絵」を通じた日韓の子どもたちによる国際交流がホームステイの試みとともに大きな実を結んだ。

絵を通じた、日本と東アジア諸国の子どもたちの交流を図る「こどもの絵展」が、今年は日韓の間で行われた。さらに今回は、子どもたち相互のホームステイも実現。直接交流という手段によって、これまでにない成果もあげている。

### ユニークなワークショップに日韓の子どもたちは大喜び。

NPO法人 国際教育情報交流協会が主管する「みんな友だち ぼくの絵わたしの絵展」は、3回目となる2010年度、日本と韓国との間で行われた。東京都の児童、釜山日本人学校児童、韓国慶尚南道児童から313の作品が集まった。

展示会はまず2010年11月23日～28日の日程で、韓国釜山に近い昌原市(チャンウォン)城山アートセンターで開かれた。

交流式典や表彰式典のあと、日韓の講師がワークショップを行った。日本から同行した美術家の高田芳樹先生が指導したのは、「出会い」をテーマとしてそれぞれが持参した自画像を元に人体表現するという試み。針金で作った身体に自画像を貼り付け、最後は手の部分を互いに巻き付けて握手をさせた。韓国のオ チャンソン先生は、全員で描きあげる絵巻づくりを、また文化研究所・田の所長であるジョン ジュンベ先生は韓国の凧づくりを指導してくれた。これまでに体験したことのない内容のワークショップに、参加した日韓の子どもたち約50名は大喜びだった。

一方、日本展の方は2011年1月17日～30日の12日間、新宿区四谷のCCAAアートセンターで開催した。韓国同様313点の作品が展示され、約800人の来観者があった。また、神奈川新聞、下野新聞等でも開会式の模様が報道された。



日韓の子どもたちが協力して絵巻を作成 (韓国城山アートセンター)



日韓の子どもたちが参加した東京展開会式 (林田国立新美術館長の挨拶)



目隠しをして彫刻作品に触れる子どもたち (四谷 CCAA アートセンター)

日本でのワークショップは、長く小学校の図工教師を務めた鈴石弘之先生の指導で行われた。2010年度にAJOSCが助成して完成した「ギャラリーフレンド」(手で触れるギャラリー)を見学した後、子どもたちは目隠しをして、ギャラリーにはなかった彫刻作品に触れ、それを紙粘土で再現するというユニークな試みに挑戦。約1時間をかけて作業をした作品を、今度は本物の作品と見比べて出来具合を確かめた。これらの作品は展示会後も、同施設で展示された。

この他、韓国では美術関係者や学校教育関係者による『国際フォーラム』が、東京では主催者のほか日韓両国の先生方とPTA関係者が参加しての『交流会』が持たれ、美術教育の情報交換や今後の継続した交流などを誓う場となった。

### 初めてのホームステイが、子どもたちの友情を育む。

今回の企画のもっとも大きな特長は、ホームステイを取り入れたことである。これは国際教育情報交流協会が国際交流基金の援助を受けて実現したもので、日本の子どもたちを韓国にホームステイさせたいという申し出に対し、韓国側からも韓国の子どもたちを日本にホームステイさせたいという返答があった。かくして、目黒区立五本木小学校の生徒10人と、韓国外洞初等学校12人が、相互訪問することになった。


まず、日本の児童が1人ずつ韓国側の児童の家に宿泊し、次いで宿泊先の韓国の児童たちが日本のそれぞれの家庭にホームステイをするというものだ。

日本ではNHKスタジオパークを見学するなどの企画



五本木小学校での歓迎会に入場する韓国の子どもたち

担当者より



まさに先入観のない  
国際交流が  
実現しました

NPO法人 国際教育情報交流協会  
理事長  
松田輝雄さん

大人たちの認識でいえば、日韓にはさまざまな問題があります。しかし、子どもたちにはまったくありません。先入観のないこうした交流を続けていくことが、もっとも効果的な平和と協調の一步になります。AJOSCからの助成に心より感謝申し上げます。

もあり、三泊四日のホームステイとなった。三日目には目黒区立五本木小学校が全校をあげて歓迎集会を行った。おはじきやコマ、紙風船など日本の伝統遊びを行い、給食を一緒に食べ、30mの紙に絵を描くなど、わずかな時間ではあったが、子どもたちには深い印象と友情が芽生えたようだ。

韓国側の団長をつとめたメン ジョンホ外洞初等学校校長もたいへん満足され、今後の継続的な交流に積極的に取り組みたいと語った。

一方、日本側の主管であるNPO法人 国際教育情報交流協会理事長の松田輝雄さんは今回の展示会について『笑顔が世界の心を結ぶ』と題した手記を寄せた。

「300点以上の絵が並んでいる教室。日韓の小学生たちが描いてくれた作品が広がっている壁。韓国から来日した子どもたちは自分の絵を見つけると、たちまち表情を変え喜びの声を上げる。互いのホームステイで知り合った日本の子どもたちと、身体をぶつけ合うように笑顔で絵を見せあっている。絵を描く楽しさをキッカケに、各国の子どもたちが出会い、大人同志も結びつける。この絵がさまざまな国の仲間と絆を創り、世界がさらに歩み寄った感動の絵画展になっている」

言葉は通じなくても、やはり実際にふれあうことに勝るものはない。子どもたちの交流が、日韓両国のさらなる結びつきにつながることを願いたい。